俳句の英訳　　長谷川櫂

作者

長谷川櫂

昭和二十九（一九五四）年。俳人。熊本県の生まれ。

中学時代から俳句をはじめており、のちに平井照敏・飴山實に学び、安東次男に兄事。東京大学法学部卒業後、読売新聞記者を経て専業俳人となる。現在、東海大学文芸創作学科特任教授・神奈川近代文学館副館長。「朝日俳壇」選者。「蛇笏賞」（角川文化振興財団）・「奥の細道文学賞」「ドナルド・キーン大賞」（草加市）選考委員。昭和六十（一九八五）年、第一句集『古志』（牧羊社）刊行。平成五（一九九三）年、「古志」創刊。平成二（一九九〇）年、『俳句の宇宙』でサントリー学芸賞。平成十五（二〇〇三）年、句集『虚空』で読売文学賞。平成二十一（二〇〇九）年、大谷弘至に主宰を譲る。安東次男・丸谷才一・大岡信らが連衆となってはじまった「歌仙の会」の現在の連衆の一人（他に歌人の岡野弘彦・文芸評論家の三浦雅士）。二十冊近い句集の他、歌集・歌仙集がある。『俳句の宇宙』『古池に蛙は飛びこんだか』他、俳論・エッセイなど多数。

出典

本文は「古池に蛙は飛びこんだか」（花神社　平成十七／中公文庫　平成二十五）によった。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「かれ朶に」→「かれ枝に」（原文Ｐ一六四・１、教科書Ｐ二八三・上段１）〔教育上の配慮〕

○「前章では、…英訳について。」→「削除」（原文Ｐ一六四・２～５、教科書Ｐ二八三・上段２の前）〔教育上の配慮〕

○「Reginald Horace Blyth　一八九八―一九六四）」→「削除」（原文Ｐ一六四・６～７、教科書Ｐ二八三・上段３「Ｒ・Ｈブライス」の後）〔教育上の配慮〕

○「イギリスに生まれ、…葬られている。」→「削除」（原文Ｐ一六四・７～Ｐ一六五・３、教科書Ｐ二八三・上段３「その一人。」の後）〔教育上の配慮〕

○『HAIKU』（北星堂書店）…この」→「削除」（原文Ｐ一六五・４～６、教科書Ｐ二八三・上段３～４「その代表的著作」の後）〔教育上の配慮〕

○「かれ朶に」→「かれ枝に」（原文Ｐ一六五・６、教科書Ｐ二八

三・上段４）〔教育上の配慮〕
○「かれ朶に」→「かれ枝に」（原文Ｐ一六五・12～13、教科書Ｐ二八三・上段10）〔教育上の配慮〕
○「かれ朶に」→「かれ枝に」（原文Ｐ一六六・１、教科書Ｐ二八三・上段12）〔教育上の配慮〕
○「かれ朶に」→「かれ枝に」（原文Ｐ一六五・４、教科書Ｐ二八三・下段２）〔教育上の配慮〕
○「意味になることは前章で、書いたとおりである。」→「意味になる。」（原文Ｐ一六五・６～７、教科書Ｐ二八三・下段４）〔教育上の配慮〕

解説

本テキストは長谷川櫂『古池に蛙は飛びこんだか』第十章「去来的、凡兆的」の、芭蕉句「かれ枝に烏のとまりけり秋の暮」について述べた冒頭部分に拠る。長谷川は、同書第九章「枯枝に烏は何羽いるか」において、芭蕉句が「たるや」から「けり」に推敲されたことによって句がどう変わったかについて述べており、それを踏まえてブライスが句を英訳するにあたって工夫した部分に言及しているのが本教科書の引用部分である。

参考

長谷川櫂は団塊の世代の後の世代を代表する俳人の一人であり、俳壇ではすでに大家と言うにふさわしい実績と存在感をもっている。しかし、この世代の俳人を論じたものに小川軽舟『現代俳句の海図 昭和三十年世代俳人たちの行方』（平成二十）があるものの、上の世代に隠れてしまったせいか、その知名度の割に論じる対象としての扱いがかなり少ないといえる。近年のエポックとしては、東日本大震災を詠んだ『震災歌集』（平成二十三）『震災句集』（平成二十四）が話題となり、賛否両論の議論を呼んだ。その経緯については、長谷川も寄稿している「現代短歌」令和三年五月号（特集「震災一〇年」）が参考になる。近年は芭蕉の再評価についての著作も多く、出典の他に、『「奥の細道」をよむ』（平成十九）、『おくのほそ道 松尾芭蕉 人生はかるみだ』（平成二十六）、『芭蕉の風雅 あるいは虚と実について』（平成二十七）等がある。

（橋本　直）